

かごしまの昔話

むかしばなし

阿弥陀様



薩摩川内市浦之名に市指定文化財「粟下磨崖仏」があります。粟下集落の国道三二八号沿いにある石段を上がると、小さな仏様の姿が見えます。そそり立つ岩壁を板碑（頂を三角にした石塔）の形にくりぬいて、高さ四十七センチほどの阿弥陀様を浮き彫りにしたものです。案内板には、「谷口家では代々子どもが早死にするのでこの阿弥陀様を刻んでお祭りをした。すると、男女六人の子どもに恵まれ、これは子産み仏だと大評判になった。廃仏毀釈の頃は、粘土で塗りつぶして守った」こ

となどが書かれています。このことについては、次のような伝承があります。三百年ほど昔、谷口平兵衛はたいそう信心深い人でした。当家では八代にさかのぼって子宝に恵まれず、自分にもまだ子どもがいなことが気がかりでなりません。ある日、屋敷近くの山の崖を眺めていて、突然、ここに阿弥陀様を刻もうと思いついたのです。そして、貞享四年二月、石工を雇いました。そして豊かな家ではないので、そのうち、石工への手間賃が滞ったり、昼ごはんも小

麦団子だけになったりしました。それでも、平兵衛の熱意に心打たれた石工は少ない手間賃で彫り続けました。半年後、ようやく阿弥陀様が岩壁に刻まれました。ところが、完成したその夜から、井戸水を汲み上げると白く濁り、どこからともなく子どもの泣き声が聞こえてきます。不思議に思った平兵衛は、易者に占ってもらいました。すると、「水が白いのは阿弥陀様が米を洗ったからで、泣き声は近いうちに子どもを授ける」というお告げでした。三年後、男の子が生まれ、それから



も次々と子どもに恵まれ、男三人女三人の子宝となったのです。これは阿弥陀様のご加護であると世間にも広まり、「子産み仏」として人々が祈願するようになりました。

谷口家ではその後、幾代にもわたってこの仏様を大事にお守りしているそうです。谷口家ゆかりの方である谷口義明氏のお話によると、岩壁に彫られたこの仏様を「あんださあ」と言っけて敬い、家の中に安置してある小さな石仏と一緒に代々受け継いでできているということです。

（原話「入来村史」）
文／有馬英子 絵／三石綱夫